



Title	創立60周年という節目を迎えて
Author(s)	塚田, 章
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 6-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

創立 60 周年という節目を迎えて

意匠学会 会長
塚 田 章

意匠学会は令和元年である今年、創立 60 周年という節目を迎えます。昭和 34（1959）年 11 月 7 日、京都の成安女子短期大学講堂で第 1 回大会が開催されました。発足当時は「関西意匠学会」という名称で初代会長は井島勉氏でした。その頃の状況はデザイン理論 7 号（10 周年記念号）に井島勉氏が寄稿されています。以下引用「私は一つの相談を受けた。関西の諸大学のデザイン関係の教官や一部のデザイナーの方々が、美学会に入会したいが、ということであった。この人たちは、デザインのすぐれた作家でもあったが、手をたずさえてデザインに関する理論的研究を推進したいという希望である。私は、美学会にお迎えすることはたやすいが、それよりも皆さんで独自の学会を組織なさる方が直接の勉強になるのではないかと答えた。これが導火線となって関西意匠学会が生まれた。」「会員には、教職に就いている人ばかりでなく、産業機関に所属するデザイナーやフリーのデザイナーも少なくない。教職人といえども大部分がデザイン活動を営んでおられる人か一部の美学者である。しかしこの学会は、たんにデザイナーの情報交換や利益擁護のための組織ではない。むしろこの学会の会員としての姿勢は、デザインに関する各種の理論研究という大目標につながっている。」この様に意匠学会の目指す方向が示されています。

意匠学会が創立されて以降の高度経済成長期の 60 年代～70 年代、デザインは活況を呈して“ものづくり大国”への原動力として機能し日本からの製品が世界中に行き渡り、加えて建築、土木という分野でも高い技術力から世界中で大きな役割を果たしてきました。今日メイドインジャパンはその品質とともに高く評価され受け入れられています。その高度経済成長期から 50 年経た今日、“ものづくり大国”は大きな曲り角に直面し日本のメーカーには閉塞感が生じています。昨今それを打破する為の方策として“デザイン思考”が注目され、デザインという言葉の意味、或いは行為そのものも広くとらえられるようになっていきます。大学教育でもデザイン学を積極的にカリキュラムに取り入れる動きが見られ、改めてデザインが重視されています。この様にデザインが果たす役割は大きく変化しつつありますが、井島勉初代会長が掲げた「デザインに関する各種の理論研究という大目標」という目指すものは 60 年を経た今でも全く変わっておらず、この大

きな曲り角に在る今日にこそ重要であると思います。

私が一昨年、本学会長を仰せつかったがその背景にも、「デザインに関する各種の理論研究」を教職人だけでは無く産業機関に所属しデザインを実践している会員、フリーランスでデザインを実践している会員、或いは公の機関で産業界に向けた技術開発を実践している会員を増やすという使命が付託された故と自覚しています。

この 60 年の間に東京オリンピック、日本万国博覧会本が開催され、多くの企業・研究者・建築家・芸術家等が起用され大きな成果を上げ以降の産業社会隆盛に寄与しました。今日、2020 年東京オリンピック、2025 年日本国際博覧会の開催を控えており、それを契機として産業社会の新たな飛躍が期待されています。ここでもデザインが大きな役割を果たすこととなるでしょうが、前回の東京オリンピック、日本万国博覧会の時点では存在していかったネットワーク社会、人工知能、に代表されるコンピューターテクノロジーの急激な進捗及び地球規模で生じる環境問題など、これまでの体験を越えた様々な様相に直面しています。2045 年にはコンピューターの能力が人類を越えるシンギュラリティを迎えるという予測もあり、それによって起こるさまざまな変化を受け身ではなくデザインする事が求められています。環境問題でもプラスチックゴミの海洋汚染、地球温暖化をどのように抑えるかなどの諸問題の解決に向けどの様にデザインして行くかが求められています。それは「デザインに関する各種の理論研究の大目標」をより幅広い専門分野（企業も含めた）間の連携を発揮する事で成される事になります。他学会との交流もその意味では大きな役割を果たしており、藤田前会長のご尽力により実現している藝術学関連学会連合シンポジウム、デザイン関連学会シンポジウムへの参加は大きな成果をあげています。意匠学会としても個の活動とは別に、専門分野を横断しての様々な研究分科会を立ち上げ継続した研究を実践する必要があると思います。

創立 60 周年である令和元年を新たなスタートラインとし、意匠学会をより活性化させ新たなフェーズに入ってゆきたいと考えます。学会員のおひとりおひとりのご活躍に期待し、本学会に集う皆様のさらなる積極的なご参加とご貢献を期待してやみません。